

スポーツを勉強したい

オリンピックが終わり、今、パラリンピックが開催されています。テレビのバラエティ番組ではメダリスト達が登場することはあっても、そこに敗者の姿はありません。国民の期待をあおり、勝利、すなわちメダルという結果が出なければマスメディアは映しません。このような勝利至上主義・メダル至上主義が、何十年続いてきたのでしょうか。最近ではメダルを取っても、それに満足しない国民による会員制交流サイト(SNS)を通じた誹謗中傷の言葉が選手を襲っています。

メダルの有無や色などを比べ、さまざまな視点で日々比較することが思考となり、その瞬間に苦しみを生んでいます。他人と比べずに生きることはとても難しいことです。

しかし、パラリンピックでは、必ずしも平等ではないにも関わらず、お互いの違いを尊重し認識した上で、公平・公正にスポーツに挑む姿が観られます。

勝利の追求や比較が、スポーツに対する私達の価値観とならないようにしたいものです。ライバルと比べることなく、お互いにこれまでの努力を讃え合う姿に勇気をもらい、目標に向かってひたむきに勉強し挑戦する姿に元気づけられます。それこそがスポーツの力だと思います。

派手に見える裏で地味な努力や勉強をしているのが、あらゆる世界のプロだと言う人がいます。

勉強は「中庸」に「はげみつとめる」という意味で用いられていると知りました。そして、今よりも多くの可能性を考え、実行に移せるような新しい自分になるために勉強するのだと考えると、いつでも始められると思うのです。

私は学習することより勉強することの方が楽しいと思います。相田みつを氏の言葉に「一生勉強 一生青春」とあります。他人と比べずに生きる勉強を、スポーツを通じてしていきたいものです。

『古文書』の学びから

『僅か 100 年前に先人が書き残した文書が全く読めないとは！』これが古文書に向き合い始めたきっかけでした。ちょうど企業人としての定年を数年後に控え、老後に何か打ち込めるものを模索していた時期でもありました。

早速古文書を学ぶための参考書、辞書類を購入し取りかかったものの、目標も計画も立てることのない独学は、一人で学ぶことの難しさを味わっただけ。それならばとカルチャー教室へ。しかし『初級』と銘打った教室は、何年間も同教室で学び続けている生徒ばかりで、ついて行くことができず、落ちこぼれ生徒の悲哀を嫌という程思い知り、会社員生活との両立の難しさもあり、これまた挫折。次に通信教育であればと思い受講を開始。朱ペンで添削された課題用紙の返却を不安や期待を抱いて待つのは、小中学生時代が思い出され結構楽しいものでした。入門・初級・中級と課程を済ませ、古文書の基礎的な知識は多少習得できたつもりでしたが、どこか今一つ満たされない感じがありました。それは、仲間と一緒に学びあう楽しさがなく、使用されている教材が地元のものでなく、今一つ身近に感じられないことなどから来るものだったと思います。

そんな折、加入している郷土（岐阜市柳津町）出身の偉人・原三溪（原富太郎）顕彰活動団体で、同団体 5 周年記念事業の一環として、富太郎自身が記した『公私日記帳』を解説することになりました。それは富太郎が明治 18 年 4 月に上京する 10 日前までの半年間、彼がふるさとで過ごした最後の記録といえるものです。富太郎は慶応 4 年（明治元年）生まれですから、日記を記したのは満 17 才。しかしその文章は達筆で、私を含め古文書素人ばかりの会員にはハードルは極めて高いものでしたが、指導いただいた先生のもと約 1 年半かけて何とか解説を終えることができました。これは会員相互に触発される学びが楽しかったこと、地元の地名・学校・神社仏閣・行事などが登場し親近感が持てたこと、そしてなによりゴール・目的が明確であったからこそと思います。

人生 100 年時代の学びやコロナ禍での教育の在り方が問われている今、ささやかなしかし貴重な体験だったと思っています。